丹治先生の思い出

関谷一彦

僕にとって丹治先生を語ることは、一緒に食事をした時間を抜きには語ることができない。丹治先生とはいろんな話をしたが、文学のこと、大学のこと、誰彼のこと（丹治先生は人を辛辣に批評するのが得意だった）を話すときにはいつも食べ物と一緒だった。僕も食べること、飲むことが大好きだが、丹治先生は食べることが生き甲斐のような人だった。「俺は闇市世代だ」と丹治先生はよく言われたが、一番食べ盛りのころに食べるものがなかった世代の一人として、まるで食べることが叶わなかった過去の悲しい思い出の分まで食べ尽くして、恨みを晴らすかのようだった。「会議」と称して、授業を終えてからさまざまな料理を食べに行ったが、その中でも丹治先生が好きだったのは肉とパスタだった。

西宮市立中央体育館のすぐ近くにあった焼肉店によく通った。もう20年近く前のことなのでその店の名前も忘れてしまったが、確か店名に「虎」という名前がついていたと思う。といっても阪神ファン御用達という店でもなかった。「おばちゃん」が一人で店を切り盛りしていて、朝鮮語を上手に操っていたから、おそらく在日朝鮮人だったのだろう。ある日、授業を終えて二人で訪れると、店の雰囲気がいつもと違い、煙が湿っているような気がした。先生はすぐにその雰囲気を察して、「今日はやめとこう」と言われたが、おばちゃんは実は今日で店を閉める、だからぜひ最後に食べて帰ってほしいとわれわれに優しく懇願した。よしそれならと座敷に上がり胡坐をかくと、すぐにビールと焼き肉が出てきて、おばちゃんは「今日はお金はいいから」と言った。店の中は韓国語と涙声が入り混じる異様な雰囲気だったが、われわれは静かに肉を味わい、ビール瓶を空けた。すると先生はそっと財布からお金を出して、お皿の下に

隠すように忍ばせた。われわれはご馳走になった礼を言い、これまでの感謝を伝え、頭を下げてその店を出たが、こうした先生の礼節を尊ぶ一連の振る舞いを見ながら、僕は先生の品格ある優しい一面を見たようで心がジーンとなった。

　われわれにとっては帰り道なので、南茨木にあるイタリアンの「ポルポ」にもよく行った。先生は前菜の盛り合わせが出てくると、それを見事に二つに切り分ける。線対象が生み出すそのシンメトリーは芸術的だった。ここには、どれほどお腹を空かせていようと、どんな関係であろうと、食べ物は平等に分けるという丹治先生の哲学があったように思う。先生はボンゴレとイカ墨のスパゲティが大好きで、取り皿に盛り付けられたスパゲティも平等を象徴していた。そしてパスタを食べるといつもネクタイに染みをつけた。その染みを見ながら、しまったという顔して「また怒られるな」というのが口癖だった。

　また、丹治先生に誘われて京都で勉強会に参加したことも忘れられない。「スプディオの会」と称する読書会は、フーコー、ドゥルーズ、バルト、トドロフなど面白そうなフランス語の本を手当たり次第に読む伝統のある勉強会だった。毎回一人が準備をしてきて、発表をする。参加者はフランス文学を専門にしている大学教員と精神科のお医者さんたちだ。僕はそこでだいぶ鍛えられたと思う。誤訳を楽しむかのように参加者はちくりと指摘する。とくに京都人は意地悪なところがあって、持って回った言い方をする。大阪とは違う文化が京都にはある。そういう意味では、丹治先生は京都人だった。直接的な批判は避けるが、言葉巧みに敵の急所を鋭く突くのが先生は得意だった。また、気に入らない人間に対しては辛らつだった。鬼のような風貌から、丹治先生に睨まれて恐れていた人も多くいた。しかし、その風貌も、その貫禄もさまざまな不正と闘ううちに自然に備わっていったものだと思われる。そこには、数多くの不

正を見てきた歴史の中で培われた生きるための芯のようなものがあった。勉強会の後は、決まって京都の先斗町にある「楽」という呑み屋で分厚いステーキを食べた。マスターが、特別メニューとして近江牛を焼いてくれる。他の客は臭いだけを嗅がされ、いい迷惑だ。そこでは、勉強会の雰囲気とは違って、和気あいあいと様々なことを話し合う。その話の中心にいつも丹治先生がいた。メンバーの誰もが丹治先生に敬意を払い、先生のことが好きだったと思う。

人に愛される人間とはどういう人だろうか？おそらく丹治先生のなかに一つの答えがある。優しさと礼節、平等であること、公正であること。辛辣な批評のなかにもユーモア、笑いがあること。これらは人を惹きつける重要な要素だ。それから、人を思いやる繊細な感性。僕はいつも注目していたのだが、先生の風貌とは裏腹に、その指は繊細で美しかった。ゴーガンを愛し、自らも絵を描くことを愛した先生の指にこそ丹治先生らしさがあると思う。心残りなのは、丹治先生の個展ができなかったことだ。何度も先生にもちかけたが実現する前に逝ってしまわれた。残念だ。